

「フランソワ・モーリャックの『愛の砂漠』
における“on”の文学的効果について」

上 條 光 子

**L'effet littéraire de “on” dans *Le Désert de l'Amour*
de François Mauriac**

Mitsuko KAMIJO

序

on には, on dit que, on dirait que の様な成句的用法や, 受動態の代わりに on を先立てて言う場合も含め一般に限定されない人々をさす on と, 他の人称代名詞の代用として限定された人をさす on とがある。後者の既知の用法には, 謙遜・偽りの謙遜・権威・自負・親しさ・語調の緩和・皮肉・軽蔑・諦め・といった様々な感情表現の用法と, nous の代用として nous を用いる程強調していないことを示す民衆語, 例えば on y va. の様な用法とがある。『愛の砂漠』に以上の用法と少し異なる用法があったのでこの考察では特にその点を探求することを目的とした。テキストにある on は表1に示したように, 全部で95個ありそのうち代用

表 1

	onの内容	会 話					地の文	小計
		C	R	M	その他	小計	作者	
第一の用法 (A)	一般の人々	5	4	6	9	24	13	37
	成句的用法	5	1	1	3	10	7	17
	関係する限定されない人々	5	2	3	1	11	6	17
	小 計	15	7	10	13	45	26	71
第二の用法 (B)	je の代用	7	2	1		10		10
	nous の代用	1	2			3		3
	vous の代用		1	2		3		3
	il の代用	1	1	2		4		4
	ils の代用						4	4
	小 計	9	6	5		20	4	24
総 計 (A+B)		24	13	15	13	65	30	95

をする on が24個で会話で、作中人物が用いているものが20個と地の文で作者が用いているものが4個とであった。

この表からもわかるように第二の用法の on は、『愛の砂漠』の中心人物3人のみが用い、しかも表2に示すように3人のみがその相手となっていることがわかった。このことからテキストのテーマとこの on とが何らかの関係を持っていることが考えられる。以上から主人公の医師クレージュ(C)と息子レイモン(R)と2人の愛人マリア・クロス(M)の三者が使用する第二の用法の on を順に調査しその特色を考察する。

表 2

話者 \ 相手	C	R	M	その他	小計
クレージュ	2	2	5		9
レイモン	1	3	2		6
マリア	2		3		5
小計	5	5	10		20

本 論

(1) Courrèges の用いた on

a) C→R

Ex.1 “Tu ne saurais croire comme il fait bon vivre au plus épais d’une famille mais oui! On porte sur soi les milles soucis des autres…Elles nous détournent de(...): je voulais attendre la fin du Congrès, (...)” (p.261)

この on は一見 n’importe qui を意味する様だが、次第に nous から je となっていることから自信をもって息子に私もそうだと言えないでいる父の気持ちを反映した on であることがわかる。従来の自負を意味する on によって実は je を遠ざけている例である。

Ex.2 ,et si son mari avait vécu, elle eût été la plus honnête et la plus obscure des femmes. On ne lui reprochait rien que cette indolence qui la rend incapable de s’ intéresser à son intérieur. (p.141)

文脈から on が、彼女の夫が活着ている頃の彼をさすことがわかる。即ち、現在のマリア・クロスからはもう遠ざかった過去の存在をさす on である。 il を遠ざけぼかした on である。これによって息子に il を気にしないようにという父の思いやりが伺える。

b) C→M

Ex.3 Le docteur était revenu en esprit auprès de Maria Cross: “Je suis un homme, Maria, un pauvre homme de chair comme les autres. On ne peut pas vivre sans bonheur; je le découvre trop tard. (p.105)

On の phrase のみをと出すと一般に人はの意味の on だが、ここでは文脈から「他の人々と同じ様に自分も実は自分が」を意味することは明らかだ。ただ「それに気付くのが遅すぎた」と言っているように、 je と言えない気恥づかしさから je を遠ざけた on と言えよう。

Ex.4 —Non, non On devient lâche, en vieillissant, Maria; on a eu sa part: on redoute un surcroit de chagrin.” (pp.254-255)

例3と同様、 on によって je と言わないでいる逃げた言い方である。

Ex. 5 Il répondit: "S'écrire n'est rien: A quoi sert d'écrire quand on ne se voit pas? —Mais c'est justement parce qu' on ne se voit pas! (p. 254)

クレージュの方は「貴女と私が合わないのに」の意味で nous の代用として on を用いているのにマリアの方は文字通り「一般にお互いが」の意にとり彼の気持ちをさらりとかわしている。on が不定代名詞であるゆえの2人のすれ違いを見る。この前者の on は、相手との間に距離を感じる為に nous と言えずぼかした on と言えよう。

c) C→C

Ex. 6 C' était ennuyeux que ce chien fût mort; on ne s' en procurait pas si aisément. (...), il n' avait pas suivi les choses d'assez près. "Je m'en suis trop remis à Robinson..." (p. 122)

この on は自由間接話法の中で用いられている。主語が on から il さらに je と変わっているように、話法が自由間接話法から直接話法へと変わっているように、医師の心が次第に自分をとりもどし落ち着いてくるのがわかる。この内的語り、せっかくの妻との夜の語らいながらの散歩の終わる直前に起こった心理的不一致の直後であることから、すぐに je にもどれないクレージュの気持ちをくんだ on、彼の気持ちが落ち着く前の不安定な状態の je をさす on であることがわかる。よってこの on は心理的に je がクローズアップされる前を表わすといえよう。

Ex. 7 Il demande à voir Raymond et Raymond est toujours sorti. Au vrai, depuis trois jours, le lieutenant Basque cherchait vainement Raymond dans Bordeaux; on n'avait mis qu'un policier amateur dans le secret: "Surtout que ça ne se sache pas..." (p. 225)

この on も自由間接話法の中で用いられ、例6とほぼ同様の用法である。「秘密のうちに」という言葉にもあるように、息子に隠れ、気がねしながらも心配している自分を on のペールでおおい遠くに隠そうとしている。その je が直接話法で前面に出てくる為、この on も気持ちの上のクローズアップされる前の状態を表わしている。

以上の例からすべての on がその内に距離を遠さを暗示する働きをもっていること、即ち心理的に離れているコト・孤独・淋しさを暗示していることがわかった。

(2) Raymond の用いた on

a) R→C

Ex. 8 —On m'avait trompé, papa; il n'y a que toi qui connaisse bien Maria Cross, je tenais à te le dire. (...) —le contraire de ce qu'il aurait voulu crier. (p. 204)

「怒鳴りつけてやりたいと思っていたこととは正反対ではないか」と言っているように、父とマリアを vous として一緒に扱いたくないレイモンは、一般的な on を使うふりをして vous と言うのを抑え、vous を遠ざけた言い方の on である。

b) R→M

Ex. 9 Il éclata de rire trop bruyamment- mais avec abandon enfin: "On ne rencontrerait tout de même dans le tram. (...)

Maintenant qu'on s'est parlé, qu'est-ce que vous voulez que ça y fasse, comment vous vous appelez?" (p.127)

Sandfeld が *Les Pronoms* の中で指摘している様に、代名動詞の場合 1 人称複数形を避け on を用いる傾向がある。しかしここでは、名前を知って nous と言いたいレイモンが、まだマリアを tu ではなく vous としか呼べないで距離を感じているゆえに、nous ではなく on をあえて用いその気持ちをおし隠しているととった方が文脈上自然である。

c) R→R

Ex.10 A quoi sert-il d'être encore jeune? On peut être encore aimé certes, mais on ne choisit plus. (p.246)

はじめの on が謙遜を、2つ目のが諦めを表わす je の代用の on ととれる様だが、一般に若者とはという意味の第一の用法の香いを強く残しているのもむしろ第三者的な眼で遠くにつき離して見た自分を表わす on といえよう。

Ex.11 Le jeune homme se livrait à des calculs: "Il a soixante-neuf ou soixante-dix ans... Peut-on souffrir encore à cet âge, et après tant d'années écoulées?" (p.258)

一般のお年寄りをさして言っているようだが、「あれ程」と暗に父を指す言葉から il の代用であることがわかる。この例も tu ではなく遠くから第三者的に見た父を表わす on である。父との間に距離をおくレイモンの心のうちが on になっていることで読者に伝わるようである。

以上の例からレイモンの用いた on もすべてが距離をもっていることがわかった。

(3) Maria Cross の用いた on

a) M→C

Ex.12 Je ne saurais vous dire à quel point j'aime ces retours en tramway. "On" se mettrait maintenant à deux genoux pour que j'accepte de remonter dans la voiture qu' "on" m' a donnée, je n' y consentirais pas. (p.87)

on に引用符がついていることから作者或いは作中人物がある意味を持たせて on を用いていることがわかる。この場合「たとえどんな人が」という口振りで医師クレージュにウィンクしながら「たとえ貴方でも」の意で on を用いているマリアがその vous を自分からわざと距離をおく為に on にした用例ととるのが文脈上自然である。孤独を愛するマリアは、一時も誰をも自分の内に入れようとしない。彼女は on を、その強さと淋しさを内に隠す最も便利な言葉として用いている。

b) M→M

Ex.13 "... Naturellement! je peux attendre! il ne viendra plus... On ne l' y prendra plus... à cet âge, on ne pardonne jamais aux gens ennuyeux... Eh bien! oui, voilà, c' est une affaire finie." (p.179)

「もう終わったことだ」と最後にもらしている様に、「彼はもう来ないだろう」と言ったあとマリアは自分のもとから過ぎ去った者としてのレイモンをさして即ち il の代用として on を

用いている。ilと言わないでいることにより過去となってしまった者にほのかな希望を隠しもっていることが伺える on であって、一種の諦めを表わす on ではない。

Ex.14 Ma loi, songe Maria, n'est-elle pas la loi commune? Sans mari, sans enfants, sans amis, certes on ne pouvait être plus seule au monde; mais qu'était cette solitude, (...) Ah! ne plus s'épuiser dans cette recherche! (p. 200)

この自由間接語法で語るマリアの告白の中の on は、直接語法・自由間接語法・地の文という語法の移行の中で、マリアが次第に孤独の自分を更に遠くに押しやっていく je の代用である。あたかもクローズアップの逆操作で遠くに去っていく感を与える。さめ切った je に行く前の「この世で表面的意味ではこれ以上孤独ではありえない私」といいつつも「私というものの中に覚える寂しさと比べてその孤独が何だ」と払いのける言葉をすぐ続けていることからわかるように別の内的私をも含ませた言葉として on となったものである。

マリア・クロスの用いた on もクレージュの用いた on と同様に単に距離をおいた者をさすだけではなく、その代用のベールの内に寂しさを隠しもった言葉として用いられていた。表2に示したように、彼女がレイモンに対して一度もこの on を用いていないことから、マリアと医師クレージュに共通した内的性格とこの on とが関連していることが考えられるが、この点については結論で述べる。

(4) 作者の用いた on

Ex.15 Il était, aux yeux des bons élèves, le sale type dont on raconte qu'il cache dans son portefeuille des photographies de femmes et (...) On savait que Raymond Courrèges jetait aux orties l'uniforme et la casquette (...): on l'avait vu "manège-salon," avec une catin sans âge. (pp. 41-42)

この on は、「あいつらは」という軽蔑を意味するレイモンの代弁とも、「例の良い子さん達は」という限定されない生徒を意味する第一の用法の単なる語り手による説明ともとれそうだが、ここは文脈上作者が、生徒達がレイモンから遠い存在として ils を on で代用させているととるべきである。なぜならば、この非常に長々とした段落(約1頁分)の中で3つの on の動詞のテンスが、現在形・半過去形・さらに大過去形と次第に現在から遠ざかっていることから、レイモンの意識から ils の存在がもうどうでもいいものとして遠ざかっていることが読みとれるからだ。彼等をレイモンから次第に遠くへおしやるクローズアップの逆操作の on といえよう。

Ex.16 On s'était levé de table: les enfants tendaient le front aux lèvres distraites des grandes personnes. Ils gagnèrent leurs chambres, (...) Raymond s'était rapproché (...) Le docteur fut frappé du geste... (p. 116)

これは段落の最初に on が来ている例である。初めから les enfants で始まらず on・子供達・レイモン・医師と登場人物を次第に絞っていくことにより、あたかも映画で人物がクローズアップされてくるような効果を出している。テキスト注1に「あの顔が彼の方に近寄ってくる。近づき、ぐっと大きくなる。スクリーンの上の大写しと同じ……」とあるように作者がクローズアップ手法を意識していることから、アップ前のより遠くの存在・子供達をさす ils

の代用として on を用いているといえよう。

以上のように作者の用いた on は、距離の効果を生かしたクローズアップ手法の on であった。

結 論

「愛の砂漠」のテーマは、医師クレージュを中心とした作中人物の心理的砂漠であり、そこにかすかにみられるオアシスのような愛である。「なぜ私達は一度も話し合わないのだ！ 父親と息子の距離はそんなにひらいているものだろうか」（注2）と言うクレージュ、「マリアと自分とのあいだの距離を心の中で縮めてしまう」（注3）レイモン、「自分の内的孤独が自然の沈黙と溶けあうことを願う」（注4）マリア・クロスの三者共、on を自分から心理的により遠く離れた存在をさす言葉として用いているが、その内的理由が表3に示すように少し違う。レイ

表 3

on の 使用者	on の心理 的理由 相手	相手との間に 距離を感じる為				相手との間に 距離をおく為				相手に対する 思いやりから				自分の 内的不安から				
		C	R	M	計	C	R	M	計	C	R	M	計	C	R	M	計	
C			1	1	2						1		1	2			4	6
R				2	2	1	3		4									
M						2			2								3	3

モンは、相手を意識して距離をおいたり距離を感じたりした為に on を用いているのに対して、他の二者は自分自身の中に距離を感じている為に、即ち自分に自信がなく不安なゆえに on を用いている。それはまさにモーリャック的人物の共通した心理状態である。ここに作中人物の不安と不定代名詞 on 自体のあいまいさを一致させるという効果的結果を見出せる、自分から離れた存在をさす on が表1に示したように je の代用であること、さらに表2に示したようにその相手が自分であること、が最も多いことから、自分から自分を遠ざけその自分に対してすら距離をおきつつ不安を感じる孤独な人物像が浮かんでくる。表3に示したように特にクレージュはマリアからも息子からさえも距離をおかれているのに対して、自分は相手に距離をおかずむしろ思いやりを示している。このことから真の主人公は、医師クレージュである。一方作者の手の内にある on は、自由間接語法と地の文のクローズアップ手法の on で、ズームレンズを動かすように on を距離を意識しながら用いることによって、作中人物の心理状態の動きを、その深い孤独を描き出している。要するに「愛の砂漠」では、on が不安を代表させる心理的距離感を表わすという文学的效果をもつものであることから、それは on がこれまでの感情表現ではなく心理表現であることを実証している。

NOTES

- (1) F. Mauriac, *Le Désert de l'Amour* (Grasset, 11^e tirage, 1943) p. 265
- (2) *Ibid.*, p. 117
- (3) *Ibid.*, p. 265
- (4) *Ibid.*, p. 200

BIBLIOGRAPHIES

- (1) F. Brunot, *La Pensée et la Langue*, Masson, Paris, 1953
- (2) Larousse, *Grammaire Larousse du XX^e siècle*, Larousse, Paris, 1936
- (3) KR. Sandfeld, *Syntaxe du Français contemporain*, Champion, Paris, 1965 — Les Pronoms —